

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 小浜市立内外海小学校 (※正式名称を記載)
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他 (例: 小中高一貫)
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒917-0106
福井県小浜市阿納尻 45-9

E-mail uchitomi@edu.city.obama.fukui.ne.jp
Website <http://edu.city.obama.fukui.jp/uchitomi/>

幼児児童生徒数 男子 40名 女子 45名 合計 85名
幼児・児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

当校は、「内外海の素晴らしい自然や伝統を未来につなごう」を活動テーマに、全体を通して、総合的な学習の時間 (ふるさと学習を含む) と ESD のファクターである体験・探究・発信・交流を位置付けた計画、実践を行ってきた。実践を通して、「本地域の海の豊かさ (自然環境)」と「人との関わりやつながり (社会環境)」を実感し、「ふるさと内外海」が水産業や観光を中心に今後も持続可能な地域社会として発展していくことができるように、自らの生き方を見つめることのできる力の育成を図った。

具体的には、地域の自然環境、伝統文化、産業を柱に、いくつかの活動分野を横断的に取り入れながら活動を行った。

① 地域の伝統文化、文化遺産・食育に係わる活動

6 年生はまず「人とのつながり」と「社会とのつながり」の面で、なれずし作りに取り組んだ。食の世界遺産に認定された田鳥区に伝わる鯖のなれずし作りを田鳥の森下氏に教わった。森下氏の伝統を後世に残したいという熱い思いに感銘を受け、積極的になれずし作りに取り組んだ。初めて鯖を捌く児童がほとんどであったが、丁寧な指導のもと、手際良く作業できるようになった。伝統を守るために、もっと PR して広めたいという気持ちをもつことができ、奈良市での PR 活動につなげることができた。

また、県立大学の教授に、発酵食品について講義していただいた。へしこやなれずしの効能や、なぜ内外海地区で作られるようになったのかという背景を学習することができた。伝統的な作業だけでなく、科学的な視点からも、なれずしの良さや地域の素晴らしさに気づく

ことができた。

② 地域の伝統文化、文化遺産・食育に係わる活動

さらに6年生は、京都へつながる海の幸が内外海地区から始まっていることに誇りを持つために鯖街道を実際に歩く活動を行った。京都までは最短距離である針畑峠越えの約72kmの行程を歩いた。日程や児童の体力面を考慮して、全体を3回に分けて実施した。

まず、起点であるいづみ町に行き、鯖街道資料館で鯖街道の歴史を学習した。そこからは徒歩で上根来地区を目指し、第一弾ゴールの登山口まで到着した。第二弾は、上根来から京都久多まで約27kmを踏破し、第三弾は久多から京都鞍馬街道までの約17kmを徒歩で、最後は鯖街道終点の出町柳榎形商店街までバスで移動し、商店街の方に出迎えてもらった。自分の足で歩くことで先人の苦労や知恵を、実感を伴って理解することができた。

③ 環境・防災・持続可能な生産と消費に係る活動

4年生では、海と山のつながりを軸に、地域の山での鳥獣被害の調査や植生の観察、山の栄養が海に流れることで得られている水産資源について学ぶためにふぐやワカメの養殖体験、関連施設見学等の体験的活動を行った。また、国立若狭湾青少年自然の家との協力の下で、スノーケリングやシーカヤックといった海での活動も取り入れながら、多角的に地域の環境を学ぶことができた。活動を通して、地域の人への啓発を行い、自分たちにできることはなにかを考えることができた。



① 6年生なれずし作り



② 6年生鯖街道踏破 京都出町柳



② 6年生鯖街道 第二弾根来坂



③ 4年生 山の鳥獣被害調査

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

--

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

ESDカレンダーを基にした、各教科等と総合的な学習の時間、ふるさと学習、食の教育などの横断的な指導計画を学校経営計画の中に位置づけ、全学年が年間を通して計画的に実践に取り組めるようにしている。地域とのつながりを重視した指導を行っている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

多くの実践が地域人材の協力が不可欠なものなので、ESDのフォルダを作成して、学年ごとに文書を保存し、人とのつながりをしっかりと引き継ぎ、取り組む学年が変わっても、継続して活動できるようにしている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

スクールプランにユネスコスクールとしての取組の明文化及び評価項目「④地域が元気になる」として位置付けた。地域の「ひと・もの・こと」との出会いをたくさんつくり、児童の学びの姿や成果を地域等に積極的に発信することができた。課題は、持続可能な社会の形成者としての行動力を学年に応じて育成していくことである。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

毎年2月に、保護者・地域の方々等を対象に1年間の学習成果を発表する場としての学習発表会を位置付けている。また、日々の活動を学校HPや学級便りで発信したり、京都や奈良市等の県外でのPR活動も行ったりしている。児童や保護者、地域の方々にとって、地域のよさの再発見、地域の活性化につながっている。児童と地域の連携がより一層強化された。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

常に公民館と連携し、地域とのつながりを生かした取組ができた。また、学年の学習内容に応じて、県立大学や県栽培漁業センター、青少年自然の家等の関係機関と積極的に連携した学習ができた。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

これまでは奈良県の平城西中学校との交流を行っていたが、今年度は交流を行うことはできなかった。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

児童がまちづくり協議会等、地域の会議に積極的に参加して活性化策等を発信することで、実際の活動に貢献できた。地域との連携が強まり、児童の取組が地域に反映されている。また、児童の活動の発信を通して、学校評価等で保護者が現状の取組を支持し継続を希望している。

- (3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

ユネスコスクールとしての取組を、スクールプランに明文化する。全学年 ESD カレンダーを作成し、教室掲示・書き込みして、児童・教師共に年間の活動を見通し振り返ることができるようにする。生活科・総合の時間でのふるさと学習を核として、内外海地区の自然・社会・人（海を中心に）とのつながりを一層強化して系統的な年間年間計画にする。また、職員室にも全学年の ESD カレンダーを掲示して、情報共有を図り、学校全体での協力体制を整備する。発信して行動できる力を育成し、地域で暮らすという活動や体験を通して、最終的には児童の生き方を変える学びを生み出せる指導を行っていききたい。